

## 平成 2 1 年 1 2 月の解説（週間天気予報）

### 【 1 2 月の天候状況】

上旬は天気が数日の周期で変わり、3 日と 5 日は低気圧の影響でほぼ全国的に天気が崩れました。中旬のはじめは日本海と本州の南を進んだ低気圧により、東・西日本の太平洋側の一部で大雨になりました。その後、寒気が日本付近に流れ込んで冬型の気圧配置となり、東北地方の日本海側と北陸地方を中心に大雪となりました。下旬のはじめも冬型の気圧配置が続きましたが、その後は天気が周期的に変わりました。29 日は低気圧の通過にともない北海道の太平洋側で記録的な大雪になりました。31 日は強い冬型の気圧配置となり、各地で大雪や強風の被害が発生しました。

月を通しての日照時間は西日本で平年より少なくなりました。降水量は北日本と東日本の太平洋側で平年よりかなり多くなりました。気温は東日本で平年より高くなりました。

### 【 1 2 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は全国平均では例年<sup>（注）</sup>より 3 ポイント高い 77% でした。北・東日本と近畿、中国、沖縄地方では 3 から 9 ポイント高くなりましたが、九州北部地方では 3 ポイント低くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は全国的に例年より小さくなりました。特に東北、北陸、近畿地方では 0.5 から 0.7 小さく、全国平均は 0.4 小さい 1.8 でした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差もほぼ全国的に例年より小さくなりました。特に九州北部・南部地方でそれぞれ 0.5 と 0.6 小さく、全国平均では 0.2 小さい 1.9 でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

### 【 1 2 月の週間天気予報から】

1 2 月 1 6 日から 2 1 日頃にかけて、日本付近に強い寒気が流れ込み、冬型の気圧配置が続きました。東日本や西日本の多くの地点で初雪を観測し、日本海側を中心に 1 2 月としては 4 年ぶりの大雪となりました。

冬型の気圧配置は、週間天気予報の予報作業で利用している数値予報モデルが精度良く予測できるもののひとつであり、予測の難しい小さなスケールの低気圧や前線などの場合に比べると、早い段階から精度の良い予報を発表することができます。この例でも 7 日前からこの冬一番の強い寒気が流れこんで冬型の気圧配置となることを予想していました。

図 1 は 1 4 日の予報に使用した 1 6 日から 2 1 日までの地上予想図です。冬型の気圧配置が持続し、期間を通して日本海側で降水が予想されています。また、図は示しませんが、上空の寒気の強さや寒気の動向から、日本海側の地方では雪が降り続き、大雪やなだれ、低温等による交通機関や農作物等への影響が予想されました。このため、1 4 日には「強い寒気

と大雪に関する全般気象情報」を発表して注意・警戒を呼びかけました。

このように気象庁では、1週間程度先までに強い冬型の気圧配置や低気圧の発達などで暴風や大雪などが予想される場合や、顕著な低温などで農作物への影響が予想される場合などにも気象情報を発表しています。有効に活用していただくとともに、その後の気象情報や警報・注意報に留意していただくようお願いします。

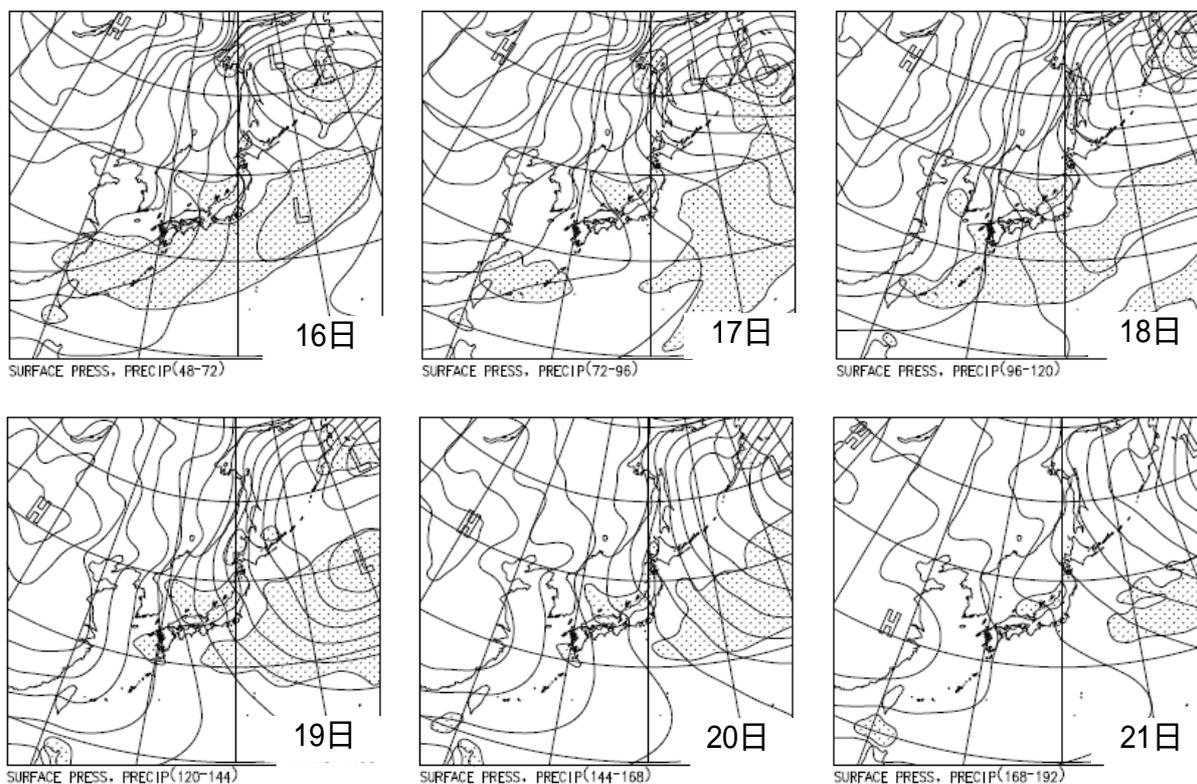


図1 「強い寒気と大雪に関する全般気象情報」を発表した14日に予報で用いた16日から21日までの地上予想図（水玉模様は降水の予想）

#### 【2月の週間天気予報の利用にあたって】

日本の南岸付近を西から東へ移動する低気圧を南岸低気圧といい、その進路や発達程度によっては本州の太平洋側の地方に雨や雪を降らせませす。低気圧に向かって冷たい北よりの風が吹き込むため気温が下がり、2月には本州の太平洋側の地方でも雪が降り、時には大雪となることもあります。天気が雨になるか雪になるか、またその量がどの程度になるかは、低気圧の進路や発達程度の微妙な違いによって大きく変わります。地域や時間によっても様々に異なる天気変化を数日前からの確に予想することは難しいことです。南岸低気圧の影響で雨や雪が降る予報が発表されている場合には、降水確率（雨や雪の降る可能性）の利用も含めてなるべく新しい予報で確認されるようお願いします。

#### 【お知らせ】

「2月の週間天気予報から」として毎月定期的に掲載してきました事例解説は、今後は特異な事例があった場合などに掲載します。